

2023 年度 デザイン工学部

自己点検・評価報告書

2023 年 12 月 6 日

目次

第 1 章 理念・目的	1
① 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。	1
② 大学の理念・目的及び学部・研究科の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。	1
③ 大学の理念・目的、各学部・研究科における目的等を実現していくため、大学として将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策を設定しているか。	2
第 4 章 教育課程・学習成果	6
① 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。	6
② 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。	7
③ 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	8
④ 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	12
⑤ 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	14
⑥ 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。 ..	15
⑦ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	17
第 5 章 学生の受け入れ	21
① 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。	21
② 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	22
③ 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。	24
④ 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	25
第 6 章 教員・教員組織	29
① 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	29
② 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	30
③ 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	32
④ ファカルティ・ディベロップメント (F D) 活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげているか。	32

- ⑤ 教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。 33

第 12 章 産学連携活動 36

第 13 章 芝浦工大の SDGs への挑戦 “Strategy of SIT to promote SDGs” 38

第 1 章 理念・目的

〈 1 〉 現状説明

- ① 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

評価の視点

- 学部においては、学部、学科又は課程ごとに、研究科においては、研究科又は専攻ごとに設定する人材育成その他の教育研究上の目的の設定とその内容
- 大学の理念・目的と学部・研究科の目的の連関性

21 世紀の社会と産業は、幅広い工学の素養や技術をバックグラウンドに持ち、同時に人の感性に応えるものづくりができる人材、つまり、コンセプトが明確になっていない段階からアイデアを生み出し、リーダーシップをもって個々の要求を整理・統合化し、ものづくりができる能力が必要とされる。

このような認識をふまえ、建学の精神である「社会に学び、社会に貢献する技術者の育成」をデザイン工学部では、デザインと工学の融合教育を通して、社会の動向を鋭敏にとらえ、それをものづくりに直接、間接的に反映できるデザイン能力を具備し、広く社会に奉仕する技術者の育成を実現しようとしている。

そのため、学部の理念としては、工学と人間の感性および社会との調和・融合を図り、創造的なものづくり能力を素養にもつ実践的人材育成を目指し、デザインを追求する社会と向き合った教育の徹底を掲げている。

また、デザイン能力を高めるために、都心立地を最大限活用した「社会・産業界と密に連携を取った体験学習」を通じて、社会の中で現実的に効果を発揮するデザイン工学を追求した教育を徹底する。

- ② 大学の理念・目的及び学部・研究科の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

評価の視点

- 学部においては、学部、学科又は課程ごとに、研究科においては、研究科又は専攻ごとに設定する人材育成その他の教育研究上の目的の適切な明示
- 教職員、学生、社会に対する刊行物、ウェブサイト等による大学の理念・目的、学部・研究科の目的等の周知及び公表

大学 WEB ページと 2022 年春から開始した学科オリジナル WEB ページに掲載することで社会に公表する一方、所属学生に対しては入学時に配布する学修の手引に記載し、ガイダンスや一年生必修授業等を通じて周知を図っている。

また、オープンキャンパス（SIT Discovery Week）における学科説明動画や高校への出張授業など、様々な機会を通じてデザイン工学部の理念と目的の周知を図っている。

③ 大学の理念・目的、各学部・研究科における目的等を実現していくため、大学として将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策を設定しているか。

評価の視点

- ・ 将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策の設定

- ・ 認証評価の結果等を踏まえた中・長期の計画等の策定

デザイン工学部では、教授会における学則改訂を審議する際や学部の将来を検討する委員会等の席において、理念・目的が社会の変化や教育体制の改革に対応しているかを検証している。

教務委員会にカリキュラム検討の機能を集約して一元化を図り、大学が掲げる「単位の実質化」等への取組も積極的に行っている。中長期の計画としては、大学のビジョンをベースとした上で、2025 年度開始を目指してデザイン工学部の新たな方向性を検討中である。上記以外の長期計画として、以下のような議論を学部長室会議を中心に行っている。

- ・ 豊洲一貫教育に関する検討
- ・ 男女参画、グローバル化を見据えた戦略的な人事計画

〈2〉長所・特色

①学部の理念・目的の適切な設定

デザイン工学という研究教育領域は、これまでの工学系やデザイン系とは異なる新しい研究教育領域であるが、幸い、デザイン工学部のディプロマ・ポリシー（学修・教育到達目標）ならびにカリキュラム・ポリシーが社会に評価され、社会が求めるものづくり人材の育成という目標が着実に達成されていると考えられる。

1) 教育の成果の評価を（議論は分かれるところであるが）就職率で考えてみる。デザイン工学部は開設以来、常に高い入試競争率と堅実な就職実績を挙げてきた。就職においては、完成年度以降常に 9 割以上の就職率を記録しており、2022 年度の就職率は 100%（就職の意思があるが卒業時未決定との報告があった者を分母とした就職率）と極めて高い値

であった。これは本学の中で最も就職率が高い学部ということになる。就職先についても、製造業を中心に、卸売・小売業、サービス業、コンサルなど、旧来の工学部の枠組みを超えて、製品の開発、製造、販売に関わるあらゆる企業のデザイン、企画、販売、製造部門に学生を送り出している。

2) 教育理念の社会（特に高校生と保護者）への浸透の評価の一つとして、入試志願者数を見ると 2023 年度志願者数は 2022 年度よりも 6%増加し、2021 年度と同等に回復した。志願者数はさまざまな要因で決まるためただちに結論付けることができるものではないが、社会的にはある程度受け入れられていると考える。なお、定量的な数値はないものの 2023 年度夏開催のオープンキャンパスでは大勢の見学者があり、依然としてデザイン工学に対する高校生や保護者の関心の高さが伺えた。

さらに、2025 年度から開始予定の新カリキュラムでは、社会の新たなニーズを取り込みながら、新たなデザイン工学の方向性を提示する予定である。

②学部の理念・目的の明示、教職員・学生への周知、社会への公表

所属学生へはガイダンス等、様々な機会を通じて周知が図られている。また、学部独自の WEB サイトを 2022 年度春に刷新し大幅に増強したコンテンツの公開、芝浦キャンパス一階での学習成果の展示、卒業展覧会の公開などを通じて、教育内容とその教育成果の発信に努めている。豊洲キャンパスへの移転により、学部共有のスペース（オープンラボ）が設置され、成果展示・卒業展示を常設している。社会一般に向けてオープン化することは、セキュリティ等の問題もあり簡単ではないが、今後検討していく。

③学部の理念・目的を実現していくための中長期計画の設定

教授会・学科会議・教務委員会においては短期的な検討を行い、学部長室において中長期計画を継続的に検討する枠組みとなっている。カリキュラム・シラバスについてもどの部分をどの組織が担当するかが明確に提示されており、教育の質保証が（属人的でなく）仕組みとして担保されるようにしている。中長期の具体的な計画策定時においては必要に応じて WG を教授会承認の下、設置している。2025 年に向けた検討もこの WG において行っており、必要に応じて「カリキュラム会議」や学科会議で全教員との議論を行っている。また、学部長室会議を中心に継続的に学部の理念・目的を適切かつ定期的に検証する仕組みもできている。認証評価制度については、学部長室を中心に報告書を作成し、評価の結果は教授会へ報告・フィードバックを行っている。

〈 3 〉 問題点

①学部の理念・目的の適切な設定

1) 他の学部、領域に比べ、学部の理念・目的を実現する教育のあり方が、一般的な通念として明確になっているわけではない。また、学部の特性上、多様な専門領域の教員が集まっている。従って、教育研究においての不確定で多様な意見が常に学部内の議論の中で内包されている。そのため、常に議論が必要であり、学部内でのコンセンサスをとる必要がある。このことは、学部としての特徴であるとともに、新領域を開拓していく上でのハードルとなっており、現状は、このことが活発な議論を生み、学部の活性化に繋がっているが、他方において早い決断や多様な問題に対する適切な対応などでは障害になる可能性がある。ただしこの課題については、全学的な教学ガバナンス改革の結果としての学長・学部長のリーダーシップによりほぼ解消されている。

2) 社会と大学のグローバル化が急速に進んでいるが、留学生向けの授業や海外提携校との連携に対応する人材の数は十分であるとは言いがたい。若手教員を中心に海外経験者を増強する計画であるが、新型コロナの影響により保留状態である。

3) デザイン工学では特定の技術を起点に解決法を考えるのではなく、常に利用者や社会の中に内在する問題を発見し、さまざまな技術で解決法を考える。必然的に、教育の方向性も常に社会の動向などによって少しずつ変わっていくことが求められる。2025 年の新カリキュラムもまさにこのためのものであり、早急に検討を進める必要がある。

②学部の理念・目的の明示、教職員・学生への周知、社会への公表

社会への周知の一環として、大学 WEB サイトでの情報開示、学習成果の展示・発表に努めている。2022 年春には学科独自の WEB サイトを大幅に刷新し、高校生にとって見易いものとした。当面はこれをベースとして、さらなるコンテンツの充実化を図る必要がある。これに加え、各種 SNS など中高生向けのメディア対策も引き続き検討する。また新型コロナの鎮静化を念頭に、従来の卒業展覧会の復活や高校訪問も検討する。

〈 4 〉 全体のまとめ

学部の理念では、工学と人間の感性および社会との調和・融合を目指して、社会と向き合った教育による創造的なものづくり能力を素養にもつ実践的人材育成をあげている。

学部の理念・目的の公表に努めた結果、設立してから短期間で急速に社会的認知度は高まっており、これは入口（入試）ならびに出口（就職）での好成績に現れていると考えられる。今後も、この基調を継続するための継続的な努力が必要であるとする。

他方において、デザイン工学は社会からの要求を常に反映すべきであり、このための継続的な変化が求められる。この一環として、2025年度からの開始を目指し、カリキュラムの大幅な刷新を検討中である。

〈5〉根拠資料一覧

- 本学ホームページ上の学科紹介ページ（<https://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/design/>）
- 学科オリジナルWEBページ（<https://www.sit-eng-design.jp/>）

〈6〉基礎要件確認シート

1 学部・研究科における教育研究上の目的の学則等への規定及び公表

学部・研究科等名称	規定の有無	根拠となる資料	公表の有無	ウェブサイトURL
デザイン工学部 デザイン工学科	○	2023年度芝浦工業大学学則別表2	○	https://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/design/

第4章 教育課程・学習成果

〈1〉現状説明

① 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

評価の視点

- 課程修了にあたって、学生が修得することが求められる知識、技能、態度等、当該学位にふさわしい学習成果を明示した学位授与方針の適切な設定（授与する学位ごと）及び公表

デザイン工学部では、大学の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）と整合性のとれた、デザイン工学部としてのディプロマ・ポリシーを設定し、本学のWEBサイトに公表している。デザイン工学部のディプロマ・ポリシーでは、「社会が求める『あるべき姿（当為）』を構築する設計科学技術』を身に付け、工学的知識と技術を基礎として、人間の感性および社会との調和・融合を図り創造的ものづくり能力、すなわちものづくり全体を表現するための1) 認識力、2) 構想力、3) 計画力、4) 意匠・設計力というデザイン能力を身に付けること」を教育の到達目標としている。

この方針に基づいて、教育研究上の目的を「多様な価値観を背景とした現代社会において、認識力、構想力、計画力、意匠・設計力といったデザイン能力に富み、「人」の心に響く魅力あふれたものづくりを志す人材を養成する」ことと定め、学習・教育到達目標を以下A-Fの6つに定めている。

- A. 幅広い教養を身に付け、地球的視点から多面的に物事を考えることができる。
- B. 技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、及び技術者の社会に対する貢献と責任を理解し、行動できる。
- C. 数学、自然科学、および情報技術の基礎的な考え方を理解し、それらを応用することができる。
- D. 種々の科学、技術及び情報を活用して、人間の感性や社会の調和・融合を図ったうえで、社会の要求を解決するためのデザインをすることができる。
 - D-1 社会的要請や利用者からの要望を認識・理解し、求められている姿・あるべき姿を見い出し、目標を設定するという全体を構想することができる。
 - D-2 目標に対して情報を収集・分析し課題設定を行い、計画を立案し、他者と協力して進め、結果をまとめることができる。

E. 専門分野の知識・技術を継続的・自主的に修得して、意匠・設計力を身に付け、それらを応用して課題を解決できる。

F. 論理的な記述、口頭発表、ならびに討議等のコミュニケーションができる。

学生が修得すべき知識は、主に上記の A、C、E による。また技能は主に D、E、F、態度は B、F に対応する。学修・教育到達目標 A から F は毎年新入生に配布する学修の手引（本学 WEB サイトにて閲覧可能）に、到達目標と学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）と共に記載し、新入生ガイダンス等を通じて説明・周知している。

② 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

評価の視点

- 下記内容を備えた教育課程の編成・実施方針の設定（授与する学位ごと）及び公表
 - ・ 教育課程の体系、教育内容
 - ・ 教育課程を構成する授業科目区分、授業形態等
- 教育課程の編成・実施方針と学位授与方針との適切な関連性

デザイン工学部では上記ディプロマ・ポリシーに掲げる目標を達成するためのカリキュラム・ポリシーを設定し、WEB サイトに公表している。カリキュラム・ポリシーは、「工学と人間の感性および社会との調和・融合を図り、創造的なものづくり能力を素養にもつ、実践的な人材を育成するため、次に示すような科目を編成し、教育目標を達成する」としている。

デザイン工学部の授業科目編成は、幅広い工学の素養や技術を身に付けるため、「共通教養科目」、「データ・サイエンス科目」を置く。また、コンセプトが明確になっていない段階からアイデアを生み出し、リーダーシップをもって個々の要求を整理・統合化し、ものづくりができるようになるための「デザイン科目」と「エンジニアリング科目」を置く。さらに知識を実践的に修得するための「プロジェクト科目」を置く。これらの科目を講義、演習、実習により体系的に編成する。「共通教養科目」は、最先端の知識を吸収し、実社会において海外の企業や外国人技術者と接していく上で必要不可欠である外国語科目、現代の技術者に求められる高い倫理観や人文社会科学系の素養を身に付けるための一般教養科目、また自分自身の将来のキャリアデザインを見据えるためのキャリア教育科目を設置している。「データ・サイエンス科目」は、数学、自然科学、情報技術の基礎的な考え方を理解しそれらを応用することと、情報を収集・分析し課題設定の支援を目的として、データ解析、データ・サイエンスの科目群で編成されている。「デザイン科目」は、エンジニアや

デザイナーが備えるべき基礎としてのデザイン能力を育むための科目群としてデザインリテラシーと、デザイナーやプランナーとして活躍するために必要なビジネスの推進に関連した科目群としてビジネスメイキングで編成されている。「エンジニアリング科目」は、デザイン工学の体系を構成する主要な専門科目を厳選し配置している。それぞれの系の中で、基礎的な科目を低学年次に、専門性や応用性の高い科目を高学年次に学ぶことで、学習の積み重ねが効果的に発揮されるようなカリキュラム構成をとっている。これらの科目を講義、演習、実習により体系的に編成している。「プロジェクト科目」では、学生の主体的・能動的な学修・研究を促す教育方法を実施し、その学修成果を多面的に評価し、学生の振り返りを促すことにより、教育目標を達成している。4年次には、それまで養ってきた総合的な学力を集約するものとして、総合プロジェクトを必修科目として配置している。

これら全開講科目の科目区分のほか、各科目の必修・選択の別、単位数はそれぞれ全学生に配布される学修の手引の科目配当表・科目配置表、大学 WEB サイト上で公開されているオンラインシラバスに明示されている。デザイン工学部で開講される科目は全てディプロマ・ポリシー上に明示された達成目標 A から F のいずれかと各科目の達成目標と関連づけられており、これはオンラインシラバス上でも公開されている。また学修の手引にはデザイン工学部のディプロマ・ポリシーとともにカリキュラムツリーを記載し、デザイン工学部の教育目標と全開講科目との関連性を明示しており、目標・方針と教育課程の整合性を確認できる。

③ 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

評価の視点

- 各学部・研究科において適切に教育課程を編成するための措置

- ・ 教育課程の編成・実施方針と教育課程の整合性
- ・ 教育課程の編成にあたっての順次性及び体系性への配慮
- ・ 授業期間の適切な設定
- ・ 単位制度の趣旨に沿った単位の設定
- ・ 個々の授業科目の内容及び方法
- ・ 授業科目の位置づけ（必修、選択等）
- ・ 各学位課程にふさわしい教育内容の設定
- ・ 初年次教育、高大接続への配慮
- ・ 教養教育と専門教育の適切な配置

・教育課程の編成における全学内部質保証推進組織等の関わり

- ・ 学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成する教育の適切な実施

デザイン工学部の教育課程の編成にあたっては、理論と実践の順に理論的な科目を基礎科目として主に低学年次に、専門性や応用性の高い科目や演習系の科目を高学年次に配置することで、学習の積み重ねが効果的に発揮されるよう十分に配慮している。またデザイン工学部では 2016 年に卒業要件に関する単位をすべて見直し、学位取得に必要な総取得単位数を 124 とした。これは 2017 年度の入学生から適用されている。さらに、2021 年に卒業研究に関する単位を見直し、単位数を 4 から 12 へ変更した。これは 2022 年の入学生から適用されている。教育の質保証の観点から、デザイン工学部開講の各科目は単位制度の趣旨に沿った単位数が設定されており、これに従って各授業で想定される授業外学修時間を各科目のオンラインシラバス上に明示し、教員・学生がともに単位の実質化を意識した学修を実践している。デザイン工学部の教育課程は、「その時々において産業界で必要とされるカリキュラムを構築し、演習などを通じて社会と人にふれあい、人と地球にやさしいデザインを追求する実践教育の徹底」を行っている。またさまざまな分野における協力・協働と、社会的・産業的な視点からのデザイン能力を身に付けるため、専門科目においては以下の 2 つの系の下にそれぞれ 3 つの履修モデルを置いて教育課程を編成している。

① 生産・プロダクトデザイン系

a.プロダクトデザイン、b.データ駆動デザイン、c.生産

※ただし、22 年入学生から b は機能デザインに変更

② ロボティクス・情報デザイン系

a.情報デザイン（UI/UX デザイン）、b.ソフトウェア、c.ロボティクス

この幅広い領域のどこに焦点を当てて学修し、将来何の仕事に携わるかなど技術者としての職業意識を養い、履修指導をしている。履修にあたり、学生自身の将来像を意識して学修できるように、デザイン工学を俯瞰的に学びつつ、同時に 1 年次から系のカラーをもたせたカリキュラム構成としている。また、入学時に卒業後の進路に対応した学修スケジュールの基本となる履修モデルを提示することで、養成する人材を明確にするとともに学生が主体性を持って 4 年間の学修計画を立てられるよう配慮している。

共通教育においては、ディプロマ・ポリシーに基づき、人間・社会を理解するための科目を中心とする「共通教養科目」と、工学とデザインの基礎知識を取得するために「データ・サイエンス科目」と「デザイン科目」の一部を設置している。

英語科目は共通教養科目の中に位置付けられ、卒業要件において最低 8 単位の取得が義務付けられている。また、「データ・サイエンス科目」はエンジニアリング科目や専門科目にとっても重要な位置付けとなるため、1 年次前期の「データ・サイエンス入門」「微積分学 1」「線形代数 1」、1 年次後期の「統計学基礎」は必修とされ、またその他 6 単位以上の取得が義務付けられている。さらにデザイン科目には 8 単位の必修科目があることがデザイン工学部の卒業要件となっており、すべての学生がデザインの分野における手法や思考を基礎としていることが特徴である。

専門教育は以下の 2 つ系の教育内容に従って構成されている。

・生産・プロダクトデザイン系

グローバル化する社会では、消費者の感性に訴える多様な製品をデザインし、効率よくタイムリーに製造していく必要がある。そのような製品開発のプロセスをトータルに考え、製品の魅力を高める能力を養成する。プロダクトデザインでは、調査・企画から設計・製造、宣伝・販売までトータルに考え、製品の魅力を高める能力を養成できるように科目が構成されている。生産システムとしては、CAD/CAM と CAE による機械設計、数値制御加工による形状加工、仕上げ・組み立て、3 次元計測による CAD へのフィードバック等の金型製作やメカニカルデザインに関する科目が設置されている。CAD/CAM/CAE を製造技術と合わせて深く理解し、解析評価することで修得される機能デザインにより、新たな価値を創出できる人材を育成するプログラムとなっている。

・ロボティクス・情報デザイン系

産業界のフォーカスは「モノからコトへ」とシフトしており、商品やサービスによって得られる価値が注目されている。この「コト」をデザインするためには、目に見えない情報に対する理解が必要である。それらを的確に操り、扱うことができる能力を養成する。具体的には UI 設計能力、ソフトウェア設計能力、機器制御能力などである。UI 設計能力の修得のためにユーザー視点の考え方や手法、情報表現の基礎から応用、そしてユーザーエクスペリエンス(UX)デザインなどを学ぶ。ソフトウェア設計能力の修得のためにプログラミング、コンピュータアーキテクチャ、ソフトウェア設計論や関連する演習を学ぶ。機器制御能力の修得へ向けては、メカトロニクスやモーションコントロールの知識と技術を身に付ける。システム全体の企画から設計・解析・製作、ソフトウェアの分析・設計・実装・テストまでに必要な科目が設置されており、新たな価値を創出し、実装できる人材を育成するプログラムとなっている。

デザイン工学部の教育課程ではデザインと工学の融合を目指している。初年次のデザイン基礎教育を通じて、学生にデザインすることの意味をインプリンティング（刷り込み、imprinting）し、この基礎教育をベースにして専門教育を積み上げていくことで、デザインと工学の融合を図っている。「構想デザイン入門」、「ものづくり概論」を必修とし、デザインと工学の基礎を学び、多様なキャリアプランの中から学生自らキャリアを選択するために必要な知識・スキルを身に付けられるよう意図されている。

また初年次から幾つかの科目で「社会・産業界と密に連携を取った体験学習」の一環として、企業の方や卒業生に来ていただき、講演会や体験談などをお話しいただいている（詳細は「産学連携活動」の章を参照）。開講科目の多くはアクティブ・ラーニングの要素を取り入れており、受動的な講義から能動的な学修への転換に積極的に取り組んでいる。

さらに1年次前期の必修の「データ・サイエンス入門」において、昨今必要なデータサイエンスのリテラシーの教育を行っている。同科目は、情報リテラシー教育、プログラミングの基礎、画像処理、データクレンジング、機械学習などさまざまな内容を取り扱っている。また2017年度からは1年次後期に4つの演習科目を設置し、全学生が必ず2つの演習を履修する選択必修としている。これにより早期から将来のキャリアや目標を意識し、実際に手を動かす演習を通して適性判断の一助ともなっている。

教養科目に入る「芝浦工業大学通論（学長など大学執行部等による講義）」という全学共通科目により、教学理念やビジョン、社会と工学との関わり、大学の過去・現在・未来を多様な視点から捉え、大学で学ぶ意味や学生としての在り方などについて自分なりに考える機会を提供している。

デザイン工学部では高大接続の取り組みとして「微積分学 1,2」、「基礎力学（データ・サイエンス科目）」では、高校の教育課程の数学Ⅲや物理の内容も範囲としながら、大学数学の基礎となる範囲を無理なく学べるように工夫されている。さらに専任教員による高校への出張講義を実施しているが、2016年度から首都圏近郊の女子高、特に本学への入学者の多い高校を中心に所属専任教員を派遣し、出張授業や高大連携の働きかけを強める取り組みを行ってきた。2020、2021、2022年度は新型コロナウイルス感染拡大を受け、高校訪問は中止したが、これまでの実績を踏まえた働きかけを検討中である。また本学併設の芝浦工業大学附属高等学校にデザイン工学部所属の複数の教員を派遣し、附属校の教員と連携しながらデザイン工学を主題とした体験授業「Arts and Tech」を2クラス開講している。当該科目は高校2年生を対象に1学期から3学期まで、デザイン工学の複数の領域にわたり学ぶことのできる内容となっている。2020年度は開講回数を減らして一部オンラインの実施となったが、2022年度はオンライン授業の開発をしながら、その他の授業は対面授業を実施した。2023年度は対面を主として実施している。さらに、2018年度から海

外協定校とのグローバル PBL の一部に芝浦工業大学柏高校からの参加の受け入れを実施し、2019 年度はさらに受け入れを拡大し、芝浦工業大学附属高校からの参加も受け入れている。(2020、2021、2022 年度前期は対象となるグローバル PBL が中止となったため見送り。2022 年度後期、2023 年度前期についてもプログラムを再開したばかりであり、受け入れを見送っている。)

④ 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

評価の視点

- 各学部・研究科において授業内外の学生の学習を活性化し効果的に教育を行うための措置
 - 各学位課程の特性に応じた単位の実質化を図るための措置（1 年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定等）
 - シラバスの内容（授業の目的、到達目標、学習成果の指標、授業内容及び方法、授業計画、授業準備のための指示、成績評価方法及び基準等の明示）及び実施（授業内容とシラバスとの整合性の確保等）
 - 授業の内容、方法等を変更する場合における適切なシラバス改訂と学生への周知
 - 学生の主体的参加を促す授業形態、授業内容及び授業方法（教員・学生間や学生同士のコミュニケーション機会の確保、グループ活動の活用等）
 - 学習の進捗と学生の理解度の確認
 - 授業の履修に関する指導、その他効果的な学習のための指導
 - 授業外学習に資する適切なフィードバックや、量的・質的に適当な学習課題の提示
 - 授業形態に配慮した 1 授業あたりの学生数
 - 各学部・研究科における教育の実施にあたっての全学内部質保証推進組織等の関わり（教育の実施内容・状況の把握等）

デザイン工学部で開講する科目はすべて、大学 WEB サイト上でフォーマットに則ったオンラインシラバスを公開している。シラバスではデザイン工学部の学修・教育到達目標に沿った達成目標の設定の他に、14 週の授業計画、予習復習の内容、授業外学習時間が確保された想定時間、評価方法と基準など、受講に際して必要十分な情報の記載がなされている。

オンラインシラバスは毎年、担当教員が確認の上アップデートすることが制度化されており、全学的に毎年記載項目の変更等が行われている。これらの変更に対応し、さらに正

確なシラバスの作成を促すため、デザイン工学部所属の専任・非常勤全教員を対象にハンドブックを配布し、説明会を実施するなどの取り組みを強化している。また全学の内部質保証の方針に従って、デザイン工学部 FD 委員会を中心にデザイン工学部開講全科目についてオンラインシラバス上の記載の適切さを確認するためにシラバスのチェックを実施している。2023 年度はデザイン工学部を含む全学部でシラバスのチェックが実施され、全科目のシラバスとカリキュラムツリーの整合性が担保されている。

デザイン工学部では、学生の主体的な参加を促すアクティブ・ラーニング科目を積極的に開講し、受動的な講義から能動的な学修の転換を図っている。2023 年度、科目コードで分類した開講科目全 194 科目中、学習者の能動的な学修への参加による授業が大部分を占めるアクティブ・ラーニング科目は 101 科目であり、また能動的な学修への参加による授業がおおむね半数、能動的な学修への参加を取り入れた授業が 1 コマ以上である科目を含めれば 93.3%が何らかの形でアクティブ・ラーニングを取り入れている。

デザイン工学部では、単位の実質化を図るために学生の履修単位の上限を年間 49 単位、各期 25 単位以下に設定している。ただし、直前期に GPA3.7 を超える成績を残した学生については 28 単位までの履修を認めている。

デザイン工学部の英語科目とデータ・サイエンス科目を中心とする一部の科目では、複数のクラスを開講することによって履修者数を制限している。英語科目については、1-2 年次開講科目は開設当初より一クラスあたりの履修者上限を 30 名程度に設定している。また、サイエンス科目については、1-2 年次の一部の開講科目を履修者上限 60 名程度に設定している。これらは入学時のアセスメント・テストや直前期の成績による学力別クラス編成を導入し、教育効果の充実とクラス毎のレベルの平準化を図っている。

学科会議では担任から学生の情報共有を行う機会が毎月ある。その上で、各期に成績を確認し、成績不振の学生をリストアップして、学年担任が逐次学習や履修についての面談・相談を実施している。

・新型コロナ感染対策に関連する事項

2022 年度からは全学的に対面授業に戻しており、2023 年度からは多くの科目が対面開講となっている。コロナ禍におけるオンライン開講での経験やノウハウの蓄積により、オンライン開講でも十分な教育効果があると考えられる科目については、引き続きオンラインで開講している。演習系を除くすべての授業は、授業内容の録画と公開が必須となっている。このため学生がコロナに罹患した場合なども、ハイフレックスでの開講にすぐ切り替えられる。学生の状況にあわせて担当教員の判断で柔軟な授業運営がなされている。

⑤ 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

評価の視点

- 成績評価及び単位認定を適切に行うための措置
 - ・ 単位制度の趣旨に基づく単位認定
 - ・ 既修得単位等の適切な認定
 - ・ 成績評価の客観性、厳格性、公正性、公平性を担保するための措置
 - ・ 卒業・修了要件の明示
 - ・ 成績評価及び単位認定に関わる全学的なルールの設定その他全学内部質保証推進組織等の関わり
- 学位授与を適切に行うための措置
 - ・ 学位論文審査がある場合、学位論文審査基準の明示・公表
 - ・ 学位審査及び修了認定の客観性及び厳格性を確保するための措置
 - ・ 学位授与に係る責任体制及び手続の明示
 - ・ 適切な学位授与
 - ・ 学位授与に関わる全学的なルールの設定その他全学内部質保証推進組織等の関わり

デザイン工学部開講科目における成績評価はオンラインシラバスに評価基準を明示し、試験、レポート、成果物等による適切な評価を実施している。2017年度から本学WEBサイト上のオンラインシラバスでは、すべての科目の成績評価の合格基準（60点）の目安を客観的な記述で示すための項目が導入された。上記のシラバス説明会などを通じ、この項目欄に達成目標の各項目についてどのような形で評価が実施されるのかをパーセンテージで示すことで、より具体的に成績評価の基準を明示するよう、授業担当教員に指導を行っている。成績はS(90点～100点)、A(80点～89点)、B(70点～79点)、C(60点～69点)、D(50点～59点)、F(0点～49点)とし、60点以上をもって合格（単位取得）とする。修得した成績のうち、「S」および「A」評価を4点、「B」評価を3点、「C」評価を2点、「D」評価を1点として、各科目の単位数に乗じて得た積（Grade Point）の合計を、登録科目の総単位数で割って算出した数値をGPA（Grade Point Average）と定義し、成績通知書に記載している。また各開講科目の最終成績評価の分布はオンラインシラバスと併せて公開されており、授業内容と評価の妥当性を受講者が確認できるように配慮されている。

成績公開後に学生から担当教員に対して、評価に対する疑問や内容の説明を求めることができる期間が設けられている。これによって評価の誤りを防ぐだけでなく、担当教員が学生に評価の根拠を明示できることが求められる仕組みが整備されている。

デザイン工学部ではディプロマ・ポリシーに則って適切な卒業要件が設定されており、大学の規定に従って、学位授与手続きが運用されている。2017年度以降、現行の卒業要件においては、総取得単位数124単位とし、2021年度入学生までは全学共通科目、共通教養科目を計28単位（うち英語科目8単位以上・全学共通科目と英語科目を除く共通教養科目16単位以上）、共通基礎科目（必修20単位・選択32単位）、および専門科目（必修4単位・選択40単位）とし、2022年度入学生からは全学共通科目、共通教養科目を計22単位（うち英語科目8単位以上・全学共通科目と英語科目を除く共通教養科目10単位以上）、データ・サイエンス科目、デザイン科目、エンジニアリング科目を計82単位（うちデータ・サイエンス科目必修6単位、デザイン科目必修8単位、エンジニアリング科目必修4単位）、プロジェクト科目20単位（必修14単位）からなる計124単位の取得を卒業の要件としている。卒業要件の詳細な内訳は学修の手引に表の形で明示されると共に、大学WEBサイト上で公開されており、学生全員が確認できるようになっている。

通常の開講科目のほかに、学外単位の認定や海外研修プログラム参加による単位認定については、それぞれ学修の手引に記載された条件に則って、シラバス内容や派遣先の妥当性を教務委員会で審議し、単位の認定を行っている。

その他開講科目の見直しなど、卒業要件に関わるカリキュラム上の変更については、教務委員会の議決による承認となり教授会へ報告される。また、卒業要件についての変更は教授会で議決することで改訂することができる。開講科目の改訂が行われた場合には掲示や大学WEBサイトなどを通じて学生に周知している。

⑥ 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

評価の視点

- 各学位課程の分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定（特に専門的な職業との関連性が強いものにあっては、当該職業を担うのに必要な能力の修得状況を適切に把握できるもの。）
- 学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握及び評価するための方法の開発

《学習成果の測定方法例》

- ・ アセスメント・テスト
 - ・ ルーブリックを活用した測定
 - ・ 学習成果の測定を目的とした学生調査
 - ・ 卒業生、就職先への意見聴取
- ・ 学習成果の把握及び評価の取り組みに対する全学内部質保証推進組織等の関わり

デザイン工学部では大学のシステムを利用し、学生の自己評価とその確認を促すために 4 年次総合プロジェクトのためのルーブリックを開発し、定期的に授業において入力を課している。ルーブリックの各項目はデザイン工学部のディプロマ・ポリシーから導かれた当該授業の学修・教育達成目標に基づいて設定されている。学期中に三度の入力期間を設け、学生が自身の進捗を確認するとともに、授業や研究における課題・学びの内容と、達成目標に関連した技能との関連を逐次確認できるようになっている。

卒業前に実施している満足度についてのアンケートでは、学部教育を通じて得た知識や能力についての質問 6 項目（「学部教育を通して、工学に必要な基礎知識を身に付けることができた」「学部教育を通して、工学に必要な専門知識を身に付けることができた」「学部教育を通して、大学入学時に比べて、論理的思考力と解析能力、総合的問題解決力が向上した」「学部教育を通して、大学入学時に比べて、広い視野と柔軟な適応力を身につけることができた」「学部教育を通して、大学入学時に比べて、コミュニケーション能力が向上した」「学部教育を通して、大学入学時に比べて、ものごとに自発的に取り組もうとする自主性が向上した」）に対する回答の平均（2016 年度以降）を見ると、卒業学生の 7 割以上が肯定的な回答を示しており（2022 年度：十分 35.4%、やや十分 51.1%、2021 年度：十分 37.9%、やや十分 49.0%、2020 年度：十分 31.4%、やや十分 49.6%、2019 年度：十分 26.1%、やや十分 52.9%、2018 年度：十分 34.9%、やや十分 43%、2017 年度：十分 32.3%、やや十分 41.5%、2016 年度：十分 34%、やや十分 43.4%）十分に高い自己評価を下していることが見て取れる。

デザイン工学部では 1 年次前期と 3 年次後期に所属学生全員を対象に PROG テストの受験と結果説明会を実施している（受験者数：2017 年度 1 年生 175 名 3 年生 92 名、2018 年度 1 年生 159 名 3 年生 41 名、2019 年度 1 年生 164 名 3 年生 153 名、2020 年度 1 年生 149 名 3 年生 111 名、2021 年度 1 年生 160 名 3 年生 148 名、2022 年度 1 年生 175 名 3 年生 152 名）。PROG テスト（<http://www.kawai-juku.ac.jp/prog/point.html>）は社会で必要とされるさまざまな技能を多角的に確認するテストであるが、これらの機会を通じて学生本人が 1 年次前期から 3 年次後期までに自身がどれだけ成長したのかを確認し、就職活動に向けて更なる成長を促すことを意図している。2020 年度の PROG テストは新型コロナウイルス感染拡大のために 1 年生、3 年生の両者とも後期にオンラインでの受験とした。2021 年度もオンラインにて実施したが、実施時期は従来のとおり、新入生は 4 月、3 年次生は 10 月に戻した。また、卒業生の意見を聴取する仕組み・機会を設けるための検討を行いたい。

- ⑦ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点

- 適切な根拠（資料、情報）に基づく点検・評価
- 学習成果の測定結果の適切な活用
- 点検・評価結果に基づく改善・向上

デザイン工学部では全開講科目で学生による授業評価アンケートを実施し、結果を担当教員にフィードバックするとともに、本学 WEB サイト上（学内ネットワークのみ）で公開している。また教員の資質向上や授業改善のために FD 委員会を中心としたさまざまな取り組みを行っている。定期的に行われる専任教員による全学オンライン FD 研究会においては、オンライン授業の質の向上のため、講義方法や試験の実施など各教員の取り組みと課題について情報を共有し、改善の検討などを行っている。新任の専任教員は学部として積極的に学内外の FD 研修へ派遣し、授業改善の手法を学ばせるとともに最近の大学と大学を取り巻く状況についての理解を促している。

〈２〉長所・特色

- ①授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

デザイン工学部のディプロマ・ポリシーは以下の通りであり、これを大学 WEB サイトに公表している。『社会が求める「あるべき姿（当為）」を構築する設計科学技術」を身に付け、工学的知識と技術を基礎として、人間の感性および社会との調和・融合を図り創造的ものづくり能力、すなわちものづくり全体を表現するための 1) 認識力、2) 構想力、3) 計画力、4) 意匠・設計力というデザイン能力を身に付けること』という、社会の要請と大学における教育を、「デザイン能力」というキーワードでつないでいるが、これは「社会に学び、社会に貢献する技術者の育成」という本学の建学の精神を「デザイン」というより現代的な視点から捉え直した、特色豊かなものである。

- ②授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

デザイン工学部では上記のような建学の精神に則った特色のある方針に沿って、現代のさまざまな問題・課題に対して具体的なアプローチを提示するための特色あるカリキュラム・ポリシーを定め、大学 WEB サイトに公開している。これは特に、デザイン能力の基礎力育成を目指す共通基礎科目デザイン科目群や、社会と大学をつなぐ試みとしての共通教養科目キャリア科目群のような科目群に象徴されており、カリキュラム全体としてデザイン工学部のオリジナリティーを意識した編成が行なわれている。

③教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

デザイン工学部の 2017 年度からのカリキュラムでは、ディプロマ・ポリシーに沿って 9 つの学修・教育到達目標が設定されていた。カリキュラムを分かりやすくして教育効果を高めるため、2022 年度からはカリキュラムを変更し、6 つの学習・教育到達目標とした。その内容に沿って共通教養科目や共通基礎科目を中心に低学年に編成し、専門科目を高学年に編成している。また、2 つの系の下に置かれたそれぞれ 3 つの履修モデルにより各目標に対して主要科目（必須科目または各履修モデルで履修が望ましいとされた科目）が設定され、全ての学生が各目標を卒業時までには修得できるように工夫がされている。

④学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

デザイン工学部では、デザイン工学という学問の特性上、多くの科目で学生の主体的な参加を促すような形での授業運営がなされており、結果として全開講科目中 9 割以上の科目でアクティブ・ラーニングを何らかの形で取り入れている。また、デザイン基礎サイエンス科目の一部では反転授業の導入によって事前の勉強と課題を行うことで学生自ら学びを行える仕組みもあり、学習成果の向上を図っている。

⑤成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

デザイン工学部開講科目の成績評価はシラバスに記載された基準に則って行われており、単位の認定もこれに沿って適切に行われている。

⑥学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

デザイン工学部ではルーブリックの活用や学生アンケート調査を中心に、学習成果や学生のニーズの把握に努めている。

⑦教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。

デザイン工学部では教授会委員会である FD 委員会を中心に、全専任教員が関わる FD 研究会を通じて教員の資質向上や授業改善に向けた取り組みを積極的に行っている。

〈 3 〉 問題点

①学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

上述のようにデザイン工学部では PROG テストを活用し、学生の学修成果の測定を行っている。しかしカリキュラム内容に沿ったより詳細な学修成果の把握のためには、アセスメント・テストとその後の GPA スコアの変遷の比較や関係の分析、高学年におけるアセスメント・テストの実施など、さまざまな施策の積極的な活用を検討すべきである。

②教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

上述のように、デザイン工学部では卒業生や関連企業を招き、直接意見を聞く機会を定期的に設けている。しかし、全卒業生やその就職先を対象としたアンケート等は実施できていない。幅広い意見の聴取のために、今後はより大規模な意見聴取の仕組みの導入を検討する必要がある。

〈４〉全体のまとめ

デザイン工学部では適切に設定されたディプロマ・ポリシーに基づきカリキュラム・ポリシーを定めており、これらはすべて本学 WEB サイト上に公表されている。デザイン工学部の開講科目は全てこのカリキュラム・ポリシーにそって体系的に開設されている。このカリキュラムにおいてより効果的な教育を実施するために、オンラインシラバスにおける成績評価基準の公開や、アクティブ・ラーニング的要素の積極的な導入などを推し進めている。デザイン工学部の開講科目における成績評価と単位認定はルールに則って適切に実施されており、その学修成果の把握には一定の課題が残るものの、現状でもループリッックやアンケートを通じて把握に努めており、全学 FD 研究会のような教員組織による学習改善の取り組みが積極的に行われている。

〈５〉根拠資料一覧

- ・ 2022 年度学生による教育評価アンケート（学部）

〈６〉基礎要件確認シート

1 学位授与方針（D P）及び教育課程の編成・実施方針（C P）の公表

学部等名称	公表の有無 (D P)	公表の有無 (C P)	根拠となる資料
デザイン工学部 デザイン工学科 (学士(デザイン工学))	○	○	大学 WEB サイト デザイン工学部-3つのポリシー https://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/design/

2 履修登録単位数の上限設定

学部等名称	上限値 (設定期間)	根拠となる資料	上限 緩和 措置の 有無	根拠となる資料

デザイン工学部 デザイン工学科	25 単位以下（半期） 50 単位未満（通年）	2023 年度学修 の手引（デザイ ン 工 学 部 ） pp. 19	○	2023 年度学修の手引 （デザイン工学部） pp. 19
--------------------	----------------------------	---	---	-------------------------------------

3 1 学期の授業期間と単位計算

[授業期間]

学期区分	授業期間	根拠となる資料
前期	4 月 1 日～9 月 30 日	芝浦工業大学学則第 62 条
後期	10 月 1 日～3 月 31 日	芝浦工業大学学則第 62 条

[単位計算]

授業形態	1 単位当たりの 学習時間	うち授業の時間	根拠となる資料
講義・演習	45 時間	15～30 時間	芝浦工業大学学則第 16 条
実験・実習	45 時間	30～45 時間	芝浦工業大学学則第 16 条

4 卒業・修了要件の設定及び明示

学部等名称	卒業・修 了 要件単位 数	既修得等（注）の認定上 限	卒業・ 修了 要件の 明示 有無	根拠となる資料
デザイン工学部 デザイン工学科	124 単位 以上	60 単位を超えない範囲	○	2023 年度芝浦工業大 学学則第 17 条、同第 21 条、同別表 7

第 5 章 学生の受け入れ

〈 1 〉 現状説明

① 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

評価の視点

- 学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針を踏まえた学生の受け入れ方針の適切な設定及び公表
- 下記内容を踏まえた学生の受け入れ方針の設定
 - ・ 入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像
 - ・ 入学希望者に求める水準等の判定方法

デザイン工学部では、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの 3 つのポリシーを定め、大学 WEB サイトに掲載している[資料 5-1-1]。ディプロマ・ポリシーでは、学位授与方針を明確にするため、以下の学修・教育到達目標を定めている。

(学修・教育到達目標)

- A 幅広い教養を身に付け、地球的視点から多面的に物事を考えることができる。
- B. 技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、及び技術者の社会に対する貢献と責任を理解し、行動できる。
- C. 数学、自然科学、および情報技術の基礎的な考え方を理解し、それらを応用することができる。
- D. 種々の科学、技術及び情報を活用して、人間の感性や社会との調和・融合を図ったうえで、社会の要求を解決するためのデザインをすることができる。
- D-1 社会的要請や利用者からの要望を認識・理解し、求められている姿・あるべき姿を見い出し、目標を設定するという全体を構想することができる。
- D-2 目標に対して情報を収集・分析し課題設定を行い、計画を立案し、他者と協力して進め、結果をまとめることができる。
- E. 専門分野の知識・技術を継続的・自主的に修得して、意匠・設計力を身に付け、それらを応用して課題を解決できる。
- F. 論理的な記述、口頭発表、ならびに討議等のコミュニケーションができる。

上記の目標を達成するため、カリキュラム・ポリシーにおいて、教育課程の編成について述べている。工学と人間の感性および社会との調和・融合を図り、創造的なものづくり能力を素養にもつ、実践的な人材を育成するため、次のように科目を編成している。

幅広い工学の素養や技術を身に付けるため、共通教養科目とデータ・サイエンス科目を置く。また、コンセプトが明確になっていない段階からアイデアを生み出し、リーダーシップをもって個々の要求を整理・統合化し、ものづくりができるようになるためのデザイン科目とエンジニアリング科目を置く。さらに知識を実践的に修得するためのプロジェクト科目を置く。これらの科目を講義、演習、実験、実習により体系的に編成する。学生の主体的・能動的な学修・研究を促す教育方法を実施し、その学修成果を多面的に評価し、学生の振り返りを促すことにより、教育目標を達成する。

ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーに基づき、入学に当たり必要な知識を示すために、アドミッション・ポリシーにおいて以下のように求める人物像を定めている。なお、アドミッション・ポリシーについては一般入学試験要項にも掲載している[資料 5-1-1]。

(デザイン工学部が求める人物像)

十分な基礎学力に加えて、21 世紀における社会と産業が求める技術者をめざす人。

創造的な発想と、問題発見・解決能力、そして総合的な視野に立ち自律的に思考できる素養を持つ人。

多彩な才能と可能性を秘め、国際社会、産業、個人の生活・関心の変化に対して敏感に適応できる人。

また、同ポリシーに関して高等学校等において身に付けておくことが望ましい能力とその判定方法として以下を挙げている。

(身に付けておくことが望ましい能力)

- (1) 高等学校等の課程で学ぶ知識・技能（特に外国語、数学、理科）
- (2) 思考力・判断力・表現力等の能力
- (3) 主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度

② 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

評価の視点

- 学生の受け入れ方針に基づく学生募集方法及び入学者選抜制度の適切な設定

- 授業料その他の費用や経済的支援に関する情報提供
- 入試委員会等、責任所在を明確にした入学者選抜実施のための体制の適切な整備
- 公正な入学者選抜の実施

・オンラインによる入学者選抜を行う場合における公正な実施

- 入学を希望する者への合理的な配慮に基づく公平な入学者選抜の実施

・オンラインによって入学者選抜を行う場合における公平な受験機会の確保（受験者の通信状況の配慮等）

デザイン工学部の入学者選抜方法は、上記アドミッション・ポリシーに基づき、多彩な才能と可能性を持つ学生を受け入れることを目的に、①数学、理科、英語等の学力を判定する一般入試（大学入学共通テスト利用方式（前期）、大学入学共通テスト利用方式（後期）、前期日程、英語資格・検定試験利用方式、全学統一日程、後期日程）、②高校生活を通じた継続的な学力を総合的に判定する推薦入試（併設校、指定校）の2つの入試形式の他、外国人留学生や帰国生徒を対象とする特別入試や国際バカロレア特別入試、駅伝プロジェクトといった多様な入学試験を実施している[資料 5-1-2]。2024年度からはAO特別入試と理工系女子特別入試も開始する予定である。

前期日程、後期日程、全学統一日程、英語資格・検定試験利用方式入試では、アドミッション・ポリシーに関連して身に付けておくことが望ましい能力(1) 高等学校等の課程で学ぶ知識・技能（特に外国語、数学、理科）を重視するとともに、記述式試験により(2) 思考力・判断力・表現力等の能力を評価する。大学入試共通テスト利用方式では、多科目の合計点により(1)の総合的な能力を重視した評価を行う。指定校推薦と併設校推薦では、調査書により(1)(2)を評価し、面接により(1)(2)に加えて、(3) 主体性をもって多様な人々と協働して学習意欲を多面的・総合的に評価する。駅伝プロジェクトについても調査書と小論文により(1)を、英語資格・検定試験を活用して「英語4技能」を、出願書類と面接によって(2)(3)を多面的・総合的に評価している。外国人特別入試や帰国生徒特別入試、国際バカロレア特別入試では、筆記試験、外部検定試験等により(1)(2)を評価し、面接により(1)(2)(3)を総合的に評価する。2024年度からのAO特別入試と理工系女子特別入試では調査書と個別学力試験により(1)を、英語資格・検定試験を活用して「英語4技能」を、出願書類と面接試験により(2)(3)を多面的・総合的に評価する予定である。

学部の入学者選抜全般に関する事項については、関連組織と協調して企画・立案・実施する学部横断組織であるアドミッションセンターが設置されている。入学者選抜方式の詳細はこの大学アドミッションセンターと学部の入試委員会が検討し、教授会の審議を経て決定される（検定試験利用方式における検定試験の種類・基準となるスコアなども同様）。また、選抜方法については、入試要項や大学WEBサイトで内容を公表し、周知を図って

いる。また合否の判定については、学部長の他、入試委員およびアドミッションセンター員、アドミッション専門員で「合否判定会議」を組織し、合格最低点、補欠範囲等を協議しながら合格者を決定し、判定案について教授会に諮り承認を得ることにより、透明性、公正性を担保している[資料 5-1-3] [資料 5-1-4]。

授業その他の経済的な負担に対する支援の情報は、毎年行われるガイダンス時に周知しており、申し出を受けて詳細な説明等の対応を行っている [資料 5-1-5]。

また、入学を希望する者への合理的な配慮として、障がい学生の受け入れについても大学の方針に従って積極的に取り組んでいる。出願希望者について、あらかじめ入試課に相談する旨を入試要項目に明記し[資料 5-1-2]、受験上の配慮が可能な出願希望者と学科が面談して、入学後の支援措置について協議している。(開設以来 2 名の学生 (2013 年度に 1 名、2016 年度に 1 名) がそれぞれ入学した)。

③ 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

評価の視点

- ・ 入学定員及び収容定員の適切な設定と在籍学生数の管理

< 学士課程 >

- ・ 入学定員に対する入学者数比率
- ・ 編入学定員に対する編入学生数比率
- ・ 収容定員に対する在籍学生数比率
- ・ 収容定員に対する在籍学生数の過剰又は未充足に関する対応

< 修士課程、博士課程 >

- ・ 収容定員に対する在籍学生数比率
- ・ 収容定員に対する在籍学生数の過剰又は未充足に関する対応

入学定員の 1 学年 160 人に対し、デザイン工学部は開設から一貫して定員を満たしてきたが、2023 年度 5 月 1 日時点の入学者数は 157 名、入学定員に対する比率は 98%である[大学基礎データ表 2]。ただし 2023 年度 5 月 1 日時点の 4 学年すべてを合わせた在籍学生数は収容定員 640 名に対して 674 名と、105%の充足率となっており、全体としては適切な数の学生数を確保している[大学基礎データ表 2]。4 学年それぞれの在籍学生数は 2023 年度 5 月 1 日時点でそれぞれ 2 年次生 184 名、3 年次生 170 名、4 年次生 163 名である[資料 5-1-6]。また過去 5 年間の収容定員充足率は、2019 年度 110%、2020 年度 104%、2021 年度 104%、2022 年度 107%、2023 年度 105%であり、全体として以前の漸増傾向(2014

年：115%／2015 年 117%／2016 年度 118%）から、より安定的に適切な度合いを保っている[大学基礎データ表 2]。

定員の管理に関しては、かつては収容定員に対する在籍学生数の超過が課題として挙げられたため、定員に対する入学者比率の引き下げが求められてきた。これに向けた努力の成果として 2019 年度の入学定員充足率は 103%、2020 年度は 98%、2021 年度は 105%と改善してきた。2022 年度は 114%と超過率が高かったが、2023 年度は 98%であり、複数年で考慮して改善できるよう 2024 年度以降も努力する必要がある。学科を構成する 2 つの系の志願者・入学者数の偏りについても、2018 年度入試以降かなりの改善がみられ、2019 年度以降、志願者数はほぼ同じ（生産・プロダクトデザイン系 2019 年度 1767 名・20 年度 1436 名・21 年度 1491 名・22 年度 1480 名・23 年度 1405 名、ロボティクス・情報系 2019 年度 1730 名・20 年度 1429 名・21 年度 1547 名・22 年度 1377 名・23 年度 1639 名）と安定している[資料 5-1-7]。入学者数もそれぞれ生産・プロダクトデザイン系 2019 年度 84 名・20 年度 79 名・21 年度 86 名・22 年度 83 名・23 年度 79 名、ロボティクス・情報系 2020 年度 80 名・19 年度 77 名・21 年度 82 名・22 年度 100 名・23 年度 78 名と、ある程度均衡した学生数を実現している。今後も同様の傾向を持続するための努力が必要であるが一定の成果を達成しつつあるといえよう。

2 つの系の在籍者数の偏りについては、入学後に移籍を認めることで、調整が可能となる仕組みが導入されている。良好な学修環境の提供という観点から、人数が一定以上超える系には移籍を認めない内規を定めているため、結果として系間の人数バランスの是正が進む可能性がある。系間の移籍には GPA の基準などのルールが設定され、これらの手続きは学修の手引に記載の上、ルールに則った移籍を認めている。

なお、編入学については、当該学年と学部全体の定員充足率を基に、募集の可否と定員を毎年決定しているが、定員充足率が十分であることから 2015 年度以降の学生募集は行っていない。

④ 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点

- 適切な根拠（資料、情報）に基づく定期的な点検・評価
- 点検・評価結果に基づく改善・向上

デザイン工学部では、入学試験の方式、入学試験方式別の募集人数、入学試験の合否判定について、アドミッションセンターと入試課から提供されるデータ（これまでの志願者状況および偏差値）等をベースとして入試委員会を中心に検証・検討を行い、定期的に教

授会で審議・決定している。入試の結果については選抜方法ごとに学部長室会議、学科会議等で報告を行い、検証を行っている。

また、推薦入試合格者に対して学習の習慣づけのために入学前準備教育を実施している。このうち数学・英語については e ラーニングを導入しており、課題の進捗率や学生の取り組みの分析を基に、それぞれの学生の学習傾向を確認できるシステムを導入している。さらに、入学時には全入学生に対し習熟度別クラス編成のために数学、物理、英語に対するプレイスメントテストを課している。（新型コロナ感染拡大防止のためプレイスメントテストは 2020 年度入学生には実施しなかったものの、2021 年度から 2023 年度は実施した。）これらの結果を入学時の基礎学力を示すものとし、学生が所属する系と選抜方式ごとに分析したり、その後の GPA の経過を分析するなどして、2017 年度入試では英語資格検定試験を使用した入試方式の導入と、質の高い入学者を確保するための推薦入試における推薦基準の見直しを行った。

〈 2 〉 長所・特色

デザイン工学部では、入学試験の方式、入学試験方式別の募集人数、入学試験の合否判定について、アドミッションセンターと入試課から提供されるデータ（これまでの志願者状況および偏差値）等をベースとして入試委員会を中心に検証・検討を行い、年度毎に教授会で審議・決定している。入試の結果については選抜方法ごとに学部長室会議、学科会議等で報告を行い、検証を行っている。

また、推薦入試合格者に対して学習の習慣づけのため入学前準備教育を実施している。e ラーニングシステムにより課題の進捗率や学生の取り組みのデータを取得し、これを確認・分析している。さらに、入学時には全入学生に対し習熟度別クラス編成のために数学、物理、英語に対するプレイスメントテストを課している。これらの結果を入学時の基礎学力を示すものとし、学生が所属する系と選抜方式ごとに分析したり、その後の GPA の経過を分析するなどしている。

〈 3 〉 問題点

入学者選抜制度の設定に関しては、アドミッション・ポリシーにおける各選抜方法が「高等学校における身に付けるべき能力」を評価する尺度に全て適切に対応しているわけではないため、今後「思考力・判断力・表現力」などを総合的・多面的に評価する選抜方法の検討が必要である。現在の選抜方法の多くは学力試験（筆記試験）に頼っており、今後「総合的・多面的」な評価の観点を取り入れた選抜方法のさらなる検討が必要である。

また、2017 年度からデザイン工学科の入学定員は 160 名へと増員されると同時に、入試についても 3 領域 4 分野から 2 つの系へと再編されて、5 年が経過し、卒業生を社会に排出した。そのため、学生の受け入れの適切性についてはこれからの動向も見極めていく必要がある。見極めにあたり、これまでの志願者状況や偏差値等の入学前データを基にした分析だけではなく、入試選抜方式や入学時プレイスメントテストの結果と卒業時の成績の相関を調査する追跡調査とその活用が必要であろう。

〈 4 〉 全体のまとめ

これまでの志願者状況と偏差値等から、これまでの学生募集と入学者選抜は、大学の基本方針と学部のアドミッション・ポリシーに則って、適切に検証され、公正かつ適正に実施されているといえる。

2017 年度からデザイン工学科の入学定員は 160 名へと増員されると同時に、入試についても 3 領域 4 分野から 2 つの系へと再編された。今後も引き続き、入試委員会を中心にアドミッションセンターや入試課と連携・協働し、公正かつ適正な学生募集と入学者選抜を実施していく。

また、学部開設時から十分な数の志願者数と入学生を確保してはいるものの、さらなる定員充足率の適正化と受け入れの適切性の検証を進めるべく、データを活用した取り組みを進めていく必要がある。

〈 5 〉 根拠資料一覧

- [資料 5-1-1] デザイン工学部 - 3 つのポリシー
<https://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/design/>
- [資料 5-1-2] 一般入学試験要項
https://admissions.shibaura-it.ac.jp/admission/exam/guideline_general.html
- [資料 5-1-3] 芝浦工業大学アドミッションセンター規程
- [資料 5-1-4] 芝浦工業大学学部合否判定会議内規
- [資料 5-1-5] 2023 年度ガイダンス配付資料
- [資料 5-1-6]
https://www.shibaura-it.ac.jp/about/info/student_number/
- [資料 5-1-7]

[https://admissions.shibaura-
it.ac.jp/admission/items/admission_result_2023_1.pdf](https://admissions.shibaura-it.ac.jp/admission/items/admission_result_2023_1.pdf)

〈 6 〉 基礎要件確認シート

15 学生の受け入れ方針（A P）の公表

学部等名称	公表	根拠となる資料
デザイン工学部 デザイン工学科	○	2024年度一般入学試験要項 大学WEBサイト デザイン工学部・3つのポリシー https://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/design/

16 定員管理

学部・学科等名称	収容定員 充足率	入学定員 充足率の 5年平均	根拠となる資料
デザイン工学部デザイン工学科	1.05	1.04	大学基礎データ（表2）

第6章 教員・教員組織

〈1〉現状説明

- ① 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

評価の視点

- ・ 大学として求める教員像の設定
 - ・ 各学位課程における専門分野に関する能力、教育に対する姿勢等
- ・ 各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針（分野構成、各教員の役割、連携のあり方、教育研究に係る責任所在の明確化等）の適切な明示

デザイン工学部の教員は、建学の精神と学部の教育目標を十分に理解したうえで、日々の研鑽と、不断の努力により、学生の成長を促す優れた教育を行う人間性と、高度なデザインと工学に関する専門性を有することが求められる。

また、世界の持続的発展に資する国際的に通用する研究教育を行い、その研究成果をもとに社会と学術の発展にデザイン工学の観点から寄与することが求められる。

デザイン工学部の教員組織の編成方針は、以下の通りである。

デザイン工学部では、学部のディプロマ・ポリシーにのっとり、工学的知識と技術を基礎として、人間の感性および社会との調和・融合を図り創造的なものづくり能力をもとに社会が求めるあるべき姿（当為）を構築する設計科学技術を身につけた人材を育成することを目標としている。

これを実現するために、以下の方針により教員組織を編成する。

- 1) 高い倫理観と社会性を有し、デザイン工学を通じて社会に貢献しようとする志をもつ教員を配置する。
- 2) グローバル社会に求められる多様性を十分に理解し、これらに配慮した教員の採用・編成を行う。
- 3) 高度な専門知識を有し、国際的に高く評価される研究力を備えた教員を編成する。

デザイン工学部の求める教員像、専門分野に関する能力や教育に対する姿勢は、特に採用において吟味される。公募においては、博士の学位を有し（または同等以上の顕著な業績や受賞歴を有する）、英語による授業が可能であることを応募資格として必ず求めている。さらに応募者の専門を通じたデザイン工学における教育ビジョンを必ず提出させており、これを重視した選考を行っている。

デザイン工学部では、豊富な実務経験を有し、デザイン工学の幅広い分野での実践的教育に対応できる教員を中心に教員組織が編成されている。教員の構成については、2つの系にそれぞれ3つの履修モデルを設定しており、それらのカリキュラム設計に適合するよう、教員数と各教員の専門分野は、系ごとにバランスを考慮し決定されている。

デザイン工学部には、学科は一学科（デザイン工学科）のみ存在するが、2つの系の連携や調整を行うため、毎月1回程度、学部長、学部長補佐と2系の幹事と共通系幹事による幹事会議を開催している。

2023年度現在のデザイン工学部学部長室は、学部長と学部長補佐1名に加え、デザイン工学部所属の学長補佐1名（共通系幹事を兼任）と2つの系の幹事2名から構成されている。学部長室会議は事務職員を加えて毎月1回程度開催され、学部運営上の課題解決や中長期的な運営方針を議論している。デザイン工学部教授会は8月を除き毎月1回予定・開催されている（ただし8月も例年臨時教授会が開催されている）。教授会規則により教授会常設委員会として教員資格審査委員会、教務委員会、単位認定委員会、FD委員会、入試委員会、企画広報委員会を設置している。

一学部一学科のため構成員は同一であるが、学科会議もほぼ毎月1回開催することで教職員間の密な連携体制を確立している。以上の各種委員会や会議の目的・役割・責任所在は明確にされている。

② 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

評価の視点

- 大学全体及び学部・研究科等ごとの基幹教員・専任教員数
- 適切な教員組織編制のための措置
 - ・ 教員組織の編制に関する方針と教員組織の整合性
 - ・ 各学位課程の目的に即した教員配置
 - ・ 国際性、男女比
 - ・ 特定の範囲の年齢に偏ることのないバランスのとれた年齢構成への配慮
 - ・ 教育上主要と認められる授業科目における基幹教員・専任教員の適正な配置（専任教員については教授又は准教授）
 - ・ 研究科担当教員の資格の明確化と適正な配置
 - ・ 教員の授業担当負担への適切な配慮
 - ・ 複数学部等の基幹教員を兼ねる者について、兼務状況の適切性

- ・他大学・企業等を兼務する基幹教員について、兼務状況の適切性
- ・教員と職員の役割分担、それぞれの責任の明確化と協働・連携

- ・指導補助者を活用する場合の適切性（資格要件、授業担当教員との責任関係や役割の明確化、指導計画の明確化等）。
- ・教養教育の運営体制

デザイン工学部には 2023 年現在、生産・プロダクトデザイン系の専任教員 8 名、ロボティクス・情報デザイン系の専任教員 9 名の計 17 名の専門科目担当教員と、主に共通科目を担当する専任教員 5 名が所属し、専任教員数は大学設置基準を満たしている。所属専任教員 22 名は、教授 17 名、准教授 4 名、助教 1 名によって構成されている[大学基礎データ表 1]。

新規の専任教員採用については、幹事会議と学科会議において承認された教員採用計画に基づいて教員採用委員会が人選を行い、教授によって構成される教員資格審査委員会の賛成を経て、大学の規定に従って採用が決定される。

デザイン工学部開講全科目の担当教員の割り当ては、系、共通系内での配置を基に、教務委員会、幹事会議、学科会議において検討・確認を行っている。カリキュラム上の中核に位置付けられる必修科目については、それぞれの科目に関連する系の専任教員を中心に担当を配置している。その他の非常勤教員が担当する開講科目は、各系と共通系のうちのいずれかが関連分野に整理されており、それぞれの科目に対して専門分野に近い専任教員が世話役として配置されている。新規に非常勤教員を採用する際には、これら科目の世話役の意見を反映し、教員採用委員会が公募を実施している。

各専任教員の授業担当の負荷を軽減するために、学生数の多い必修科目を中心に非常勤教員との共同担当や TA・SA の積極的な活用を図っている。またデザイン工学部では gPBL の件数も多く、これら正課授業外の教育上の負担軽減策について教務委員会を中心に検討が進められている。

デザイン工学部所属教員の男女比については、全専任教員 22 名のうち女性は 4 名、18.2%である。これは本学の男女共同参画事業の今年度目標 20%をわずかに下回っているが来年度には 20%を超えるよう検討している[資料 6-1]。国際性については外国籍の教員 1 名のほか、海外で博士学位を取得している教員数が 2 名、海外において通算 1 年以上研究を行った教員が 4 名所属しており（うち 2 名は重複）、よいバランスを保っている。また専任教員 22 名の年齢構成は、30 代以下 2 人、40 代 5 人、50 代以上 15 人となっている。共通系の科目も一部の全学共通科目と教職科目を除き、原則として専門科目同様に学部として開講・運営している[大学基礎データ表 5]。共通系に所属する専任教員 5 名中、数学を主に担当する 2 名・英語を主に担当する 1 名のほか、共通基礎系科目のように専門の

基礎となる科目を担当する教員 2 名を配し、バランスよく配置している。いわゆる教養科目にあたる共通教養（外国語以外）科目についてもこれら 5 名の一部が、専門に関連する科目（「工学倫理」「科学技術論」「経済学」「経営学」等）を担当し、知見を有する科目の世話人を担当するなど専門科目と教養科目の連携を保つための仕組みを導入している。

③ 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。

評価の視点

- 教員の職位（教授、准教授、助教等）ごとの募集、採用、昇任等に関する基準及び手続の設定と規程の整備
- 規程に沿った教員の募集、採用、昇任等の実施

新規の教員募集はデザイン工学部教授会による審議を経て、公募により実施される。教員資格審査は大学設置基準や大学の専任教員人事規定と任用手続き規定に沿って、教員資格審査委員会によって実施されている。専任教員の公募に際しては、学部長室会議、学科会議等での議論を経て、研究分野等の公募要領をデザイン工学部教授会において審議される。

専任教員の昇格については、デザイン工学部内規に従い実施される。年度ごとに各系からの推薦を受け、学部長が教育・研究業績を確認の上、教員資格審査委員会、教授会の審議を経て実施される。非常勤教員の昇格は大学の非常勤人事規定に従って学部長室会議で確認の上、教授会の審議を経て実施される。デザイン工学部ではこれらの手続きに従って、2015 年度以降、15 年に 2 名、17 年 1 名、20 年 4 名、23 年 3 名が准教授から教授に昇格した。また、助教から准教授についても、18 年 1 名、19 年 1 名がそれぞれ昇格している。

④ ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげているか。

評価の視点

- ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動の組織的な実施
- 教員の教育活動、研究活動、社会活動等の評価とその結果の活用
- 指導補助者に対する研修の実施

FD 活動は小規模学部としては活発に行われている。常設の FD 委員会を中心に、学部全体で FD 活動に積極的に取り組んでいる。FD 委員会では本学優秀教育賞への推薦者の選考に当たっているほか、授業改善などさまざまな FD に関係するテーマについて、デザイン工学部専任教員が参加する研究会を定期的に主催している。特に 2020 年度からの新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン授業、ハイブリッド授業が急増したことか

ら、これらに関する各教員の取り組み等が全学の FD 活動で活発に紹介・共有されており、これを利用してさまざまなツールなどの使い方やノウハウの共有を図った。

デザイン工学部所属専任教員は毎年度、教育・研究等業績評価シートを基に自己点検を実施するとともに、学部長がその内容を確認することで、個々の教員の目標と達成度合いの適切さを確認している[資料 6-2]。また、2017 年度から FD 活動の一貫としてシラバスの相互チェックを開始した。各教員が互いのシラバスを予め決められたチェックシートにより確認し、問題がある場合は担当教員に連絡される仕組みを構築した。

⑤ 教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点

- 適切な根拠（資料、情報）に基づく定期的な点検・評価
- 点検・評価結果に基づく改善・向上

教員組織のあり方については、学部長室において年に一回の見直しを行っている。組織の見直しに当たっては、各委員会の業務内容を勘案し、突出して負荷が掛かっている教員がいないかなどの観点から検討している。

例えば、2016 年度までは入試委員会の業務負担が大きかったため、2017 年度から企画広報委員会を立ち上げ、オープンキャンパスや高校訪問などの業務を受け持つこととした。2019 年からは高校関連のさまざまな業務が増えたため、高大接続担当を新設した。この担当は、高校関連イベントの各教員負担の均等化調整を行っており、教員負荷の適正化に貢献している。

〈2〉長所・特色

①の教員像や組織編成の方針の明示に関しては、公募要領に明示され、それに従った選考を行っている。また、各種委員会はその目的・役割・責任の所在を明確にした上で設置している。

②の適切な教員組織の編成に関しては、2017 年度に再編した 2 つの系から成る構成への移行が 2020 年度にほぼ完了し、系を中心とした教育・研究の運営が定着した。カリキュラムはさまざまな専門性が混在しており、この中で主要授業科目に適正な専任教員の配置を考慮していく必要がある。これについては新カリキュラムを検討した時点で人員計画を策定しており、これに従ってバランスよく構成されている。

③の適切な教員の採用に関しては、常に女性教員の採用と国際性を重視している。女性比率の一層の改善が望ましいとはいえ、女性比率は現在、本学の男女共同参画推進事業の2022年からの目標である20%とほぼ一致する。国際性についても外国籍教員1名、海外学位を取得教員2名、在外研究歴1年以上の教員4名と、十分な国際経験を有している教員がいる。また、開設時に偏りの見られた教員組織の年齢構成は、採用計画に従って改善してきていたが、在職教員の年齢は毎年上がることから、今後も改善への努力が必要であろう。

④のFD活動について、例年専任教員が参加するFD研究会を開催し、さまざまなテーマについて議論の共有を図っている。そのほかFD委員会が中心となりシラバス説明会の実施や、シラバス内容のチェックなどの施策を行っている。

⑤の教員組織の定期的な点検・評価については、学部長室会議を中心に年に一回の見直しを行っている。

〈3〉問題点

②の適切な教員組織の編成に関しては、2025年度から開始予定の新カリキュラムに向けて、教員の専門性を考慮し適正な編成を進めている。今年度から工学部との間の人事異動により新カリキュラムに合った教員配置や、新規採用等により新コース体制へ向けた適正な配置が進んだ。しかし、デザイン工学部では2系から3コースとなる大きな変更を伴うため、2025年までに計画している教員採用を的確に行っていく必要がある。デザイン工学部は、教員数に比して教授会組織や担任業務などを含む校務に必要な人員が多く、単位の実質化や国際化業務など大学の施策への積極的な取り組みの結果、専任教員の負荷が大きくなる傾向が高い。教育の充実や研究活動のさらなる促進のためにも、専任教員の負担を解消するための施策の検討が求められる。

③の適切な教員の採用については、必要な時期に適切な公募を行っているものの、応募者が少なく結果的に適切な候補者を選べず採用できなかったケースがある。デザイン工学という名称から自分の専門性とは異なると受け止めて応募を躊躇する方が多数いるのではないかと考えられるため、引き続き広報等により工夫を図る必要がある。また、女性教員や国際性のある教員の相対比率についてはすでに一定の水準にあるものの、継続的な努力が求められる。

⑤の教員組織の適切性の評価については、ある程度の根拠に基づいた評価を行っているものの、十分に定量的な評価となっていない面もある。評価方法の改善が求められる。

〈４〉全体のまとめ

教員像や教員組織編成の方針については、各種委員会や各種会議の目的・役割・責任の所在が明確化されている。適切な教員組織の編成に関しては、バランスよく構成されているものの、専任教員の負担がやや大きく、偏りがあるという問題がある。適切な教員の採用については、各種手続きや規定に従って実施されている。教員採用への応募者が少ないという問題について対処する必要がある。FD 活動については、教員の資質向上や組織の改善に向けて、さまざまな活動が行われている。教員組織の適切性の評価についても問題なく実施されているが、評価のさらなる定量化が求められる。

〈５〉根拠資料一覧

- 資料 6-1: https://www.shibaura-it.ac.jp/about/info/faculty_number.html
- 資料 6-2: 教育・研究等業績評価シート

〈６〉基礎要件確認シート

17 設置基準上必要専任教員数の充足

	学部・学科等名称	総数	教授数	根拠となる資料
学部・学科等	デザイン工学部 デザイン工学科	○	○	大学基礎データ（表１）

18 ファカルティ・ディベロップメントの実施

学位課程種類	実施有無	根拠となる資料
学士課程	○	

第 12 章 産学連携活動

〈 1 〉 現状説明

デザイン工学部の教育理念に「社会および産業界と密に連携を取った体験学習を通じてデザインを追究する実践教育を徹底する」とあるように、設立当初から産業界との連携を重視している。主な活動パターンとしては、次の 2 つがある。

(ア)教育:産業界の講師を招き、大学での学修内容と企業活動の関連性を学ぶ。また、産業界の講師から、演習テーマの出題や演習成果に対する講評をいただくことで体験学習を行う。

(イ)研究開発:企業の抱える課題について研究室（教員・大学院生・学部生）が共同研究として取り組み、解決法を提案する。

教育に関しては、2022 年度後期から 2023 年度前期の主な取り組みの事例として以下を挙げることができる。

- ・企業講師を招聘しての講演 12 科目 28 社（前年度 22 社）
- ・企業講師を招いて演習課題の出題や演習成果の講評 6 科目 30 社（前年度 13 社）

前年度はコロナ禍のため実施することができなかった演習とインターンシップを連携した実践的教育も 9 月に実施しており、全体として前年度を上回る件数となっている。

研究開発については、2023 年度の実績としては 27 件の共同・受託研究がある。なお、2022 年度の実績は 27 件、2021 年度は 26 件、2020 年度の実績は 13 件であった。一昨年度は新型コロナウイルスの影響が小さくなり、件数が大きく増加したが、ここ 2 年間はほぼ横ばいとなっている。ただし、大学と企業間での共同研究契約の締結には至っていないものの、総合プロジェクト（卒業研究）において企業と連携した事例が複数あり、また大学発ベンチャーの設立に向けて活動している事例や、すでに共同研究締結に向けて手続きを始めている事例もあるなど、実数以上の産学連携を進めている。

〈 2 〉 長所・特色

本学部の教育研究上の目的には、デザイン工学は「コンセプトが明確になっていない段階からアイデアを生み出す」とある通り、いわゆる工学系の学部が専門に分化している

のに対して、デザイン工学はどの専門技術で解決すべきかが分からない問題も扱う。このため、実際の複合的な問題を対象とすることはきわめて重要であり、この意味で産学連携は本学部にとって教育そのものである。

教育においては、企業から講師を頻繁に招き、企業から見た成果の講評を依頼するなど、単なる講師招聘以上の連携を図っている。2020 年度からオンライン授業環境の整備によって、新型コロナウイルス感染症が終息を見せない状況にあってもオンラインでの講師の招聘が可能となったことと新型コロナウイルス感染症の影響も小さくなったことで、3 年続けての件数の増加となった。また、オンライン化により遠隔から講師が参加することが可能となり、むしろ講師の招聘が容易になったことも、この結果につながったといえる。

研究開発においては、2022 年度実績の共同研究テーマを見ると、日本の物づくり技術を生かした魅力的な製品の提案といったプロダクトデザイン分野、新しい加工技術や材料の劣化診断といった生産分野、ユーザインタフェースデザインなどの情報デザイン分野、遠隔操作ロボットなどのロボティクス分野といったように、学科内の各系のデザインとエンジニアリング双方の課題が広く取り組まれているのが特徴である。

〈 3 〉 問題点

産学連携に力を入れる教員と、科研費などの基礎的研究に力を入れる教員が比較的分かれてしまっている。産学連携の共同研究を実施している教員は生産・プロダクトデザイン系に比較的多く、これには分野による違いもあるものと考えられる。この点について言えば、属人的な体制に陥らないよう留意する必要がある。研究の進捗状況により基礎研究と応用指向の開発に近い研究のフェーズがあるのはやむを得ないが、本来は基礎的研究から産学連携の応用指向研究へと各教員が進んでいくべきであろう。基礎的研究に力を入れる教員に対して、応用の機会を提供すべく、本学では複合領域産学官民連携推進本部がコーディネートをしているが、教員側からもこれに積極的に関わるような施策が必要である。

〈 4 〉 全体のまとめ

「デザイン工学」の教育において、産学連携は極めて重要であり、教育と研究開発の両面から、本学部は継続的に取り組んでいる。既に産業界から講師を招へいしたり、共同研究を実施するなどの形で、十分な産学連携を実現している。現在産学連携に直接関わっていない教員にも、産学連携が可能な研究成果をもっている者が多くおり、それらの研究成果と産業界との要望のマッチング・コーディネートの推進が課題となる。

〈 5 〉 根拠資料一覧

- 各科目のシラバス <http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/>
- 産学連携本部からの開示データ

〈 1 〉 現状説明

デザイン工学は、問題が不明確な状態から問題を確定し、解決法を考案するプロセス全体を対象とする。最終的にどのような状態を求め、何に価値を見い出すかは、問題を確定するために重要であり、デザイン工学を探究する者は常にこれを意識しなければならない。SDGs は世界全体として長いスパンで目指すべき目標であり、その多くはこれまでのデザイン工学が意識していた目標であるが、SDGs として具体化されたことはデザイン工学にとって、とても良い指針である。

このようなことから、デザイン工学部ではこれまでに次のような取り組みを行ってきた。

- (ア)各科目が SDGs に関連する場合は、シラバスにて SDGs の番号を示している。また、学部の教育方針や卒業要件などの教育課程、授業科目について記載した「学修の手引」にも 2020 年度から「特色ある科目」として SDGs 関連科目について記載し、学生への周知を図っている。
- (イ)2020 年度から、卒業研究（本学部での科目名は「総合プロジェクト」）と SDGs の関連性を考察し、発表時に SDGs のアイコンを提示することとした。
- (ウ)2020 年度にカリキュラム・ポリシーに対して「持続的な社会」を目指すことを明示する修正を行った。
- (エ)個々の教員が、持続的な社会を目指して教育・研究活動を既に実施している。例えば、2022 年度には東京都港区と連携し、「SKDs 学びのまちプロジェクト」の一環として、地域情報誌「べいあっぷ」へ学生記事を寄稿している。

〈 2 〉 長所・特色

シラバスにおける SDGs 番号付与率は 94%（昨年度 92%）であった。付与された番号（複数項目指定あり）の割合の上位 5 位は次の通りであった。

- 66% 9 番「産業と技術革新の基盤をつくろう」
- 56% 4 番「質の高い教育をみんなに」
- 34% 12 番「つくる責任 つかう責任」
- 24% 3 番「すべての人に健康と福祉を」
- 21% 8 番「働きがいも 経済成長も」

6 位以降も見ると全ての番号が付与されている。

2022 年度卒業研究の最終審査におけるアイコン付与率は 86% (昨年度 88%) であった。高い付与率であったと言えよう。卒業研究に付加されたアイコン（複数項目指定あり）の内訳の上位 5 位を見ると次の通りであった。

- 5% 9 番「産業と技術革新の基盤をつくろう」
- 25% 12 番「つくる責任 つかう責任」
- 15% 4 番「質の高い教育をみんなに」
- 15% 3 番「すべての人に健康と福祉を」
- 10% 11 番「住み続けられるまちづくりを」

付与されていない番号は、1 番、2 番、5 番のみであった。

これらのデータから、デザイン工学部の研究が広く SDGs をターゲットとしていることが分かる。定量的な値はないが、一般の工学系の学部の卒業研究に比して、より広い範囲をカバーしていると言えることができるであろう。

〈 3 〉 問題点

上記はいずれも個々の科目ないしは個々の研究ベースであり、取り組みの端緒についたばかりであることもあり、SDGs 全体を推進するための Strategy を立て、学部全体で体系立った動きには至っていない。しかしながら前述のようにデザイン工学においては、価値を定義して問題を明確化する段階から SDGs に類する考え方を必然的に行っており、このことは卒業研究に付与された SDGs アイコンの種類の多さに十分に示されている。従って、教育や研究の場面において SDGs をさらに意識付けるような施策を推進することによって、大きな前進に繋げることが可能であろう。

〈 4 〉 全体のまとめ

デザイン工学は SDGs に近い考え方を元々内包しており、このため既に教育や研究において取り組みが進められている。現状は、それらの活動にアイコンを紐づけた段階に過ぎないが既に十分な活動が見受けられる。今後は、この「紐づけ」を進めて各教員に意識させることを、学部の strategy として進める。

〈 5 〉 根拠資料一覧

- 各科目のシラバス <http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/>
- カリキュラム・ポリシー <https://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/design/>
- デザイン工学部 2023 年度学修の手引

https://www.shibaura-it.ac.jp/campus_life/class/class.html